# 金剛寶戒寺便り

十月一日発行　第七号

檀信徒の皆さんこんにちは。春が来た。夏が来た。冬が来たとは言いますが、秋が来たとは言いませんね。秋が来た。は夏が終わったで代用されるからでしょうか？お寺は虫の音が代わり金木星が香り、芙蓉が彩りを添えてくれています。季節の移り変わりのある日本は幸せですね。

金剛宝戒寺の北西に衣ケ池と呼ばれる池があるのをご存知でしょうか？今では畳三畳もない程の大きさの池ですが、先代の住職が小さかった頃は泳ぐ事が出来るほど大きかったそうです。小さくなってしまった池ですが、どんなに渇水になっても池の水が枯れた事はありません。その池が「衣ケ池」と呼ばれるゆえんは、その昔お大師様。弘法大師空海がその池の水で衣を洗ったからだと言われています。

お大師様が活躍されたのは今からおよそ一二〇〇年前の平安時代です。今のように飛行機や新幹線、高速道路も無い時代ですが全国各地にお大師様にまつわる伝承が伝えられています。歴史的にはそこの場所にお大師様は立ち寄られていないのでは？と思われる所にも多くの逸話が残されています。

お大師様が太宰府に滞在されたのは歴史的事実ですが豊後の国を訪れたかは分かりません。でも一二〇〇年前にお大師様が私たちのお寺にもお立ち寄りになり、衣を洗ったと聞くと、普段私たちがお参りをさせてもらっている御本尊様にもお大師様はきっと手を合わせたではないかと思うのです。ふとその情景を目に想い浮かべるだけでロマンを感じさせてくれます。今となっては史実を確かめる方法もありませんが、九州滞在中にお大師様がお寺の門をくぐられたと願いたいものです。

高野山にも多くの伝承があるのですが、高野山の伽藍内、金堂と御影堂の間に「三鈷の松」と呼ばれる松の木があり、次のような逸話が残されています。

密教を学ぶために遣唐使船に乗り中国へ留学されていたお大師様が、唐より帰国される折、明州の浜より真言密教をひろめるにふさわしい場所を求めるため、日本へ向けて三鈷杵（さんこしょう）と呼ばれる法具を投げたところ、たちまち紫雲（しうん）たなびき、雲に乗って日本へ向けて飛んで行きました。後にお大師さまが高野山近辺を訪れたところ、狩人から夜な夜な光を放つ松があるとのことを聞き。早速その松へ行ってみると、そこには唐よりお大師様が投げた三鈷杵が引っかかっており、お大師さまはこの地こそ密教をひろめるにふさわしい土地であると決心され弘仁七年（八一六）六月十九日、修禅の道場として高野山の下賜を嵯峨天皇に請い、七月八日には、高野山を下賜する旨勅許を賜り伽藍の建立に着手されました。

その松は三鈷杵と同じく三葉の松であり、「三鈷の松」としてまつられています。現在では参詣者の方々が、縁起物として松の葉の落ち葉を持ち帰り、お守りとして大切にされています。

来年一二〇〇年を迎える高野山御開創の礎となる「飛行三鈷杵」の伝承は、今日も後人弟子達によって大切に語り継がれており、お大師さまが念じられる御開創の目的となる祈りが続けられております。

その三鈷杵を模した「祈念三鈷本尊」と、高野山の霊木を彫った全長一メートルの大三鈷杵（撫で三鈷）そして奥之院で永き星霜を護り続ける「不滅の聖燈」が高野山結縁行脚として全国を廻っているのですが、年末の十二月三日に金剛宝戒寺にもお立ち寄りになることに決まりました。地方寺院にて結縁行脚をお迎え出来るお寺は多く有りませんので、これを記念して例年は十二月二十一日に行っています千巻心経をこの日に合わせて行いたく思っております。

来年の四月に団体参拝で高野山に上がれない方も高野山の霊木「撫で三鈷」に触れて高野山とのご縁、お大師様とのご縁を結んで頂きたく思っております。

お檀家様からご要望の多い納骨堂の建設を検討しております。ご意見、御希望、質問など有りましたらお聞かせ下さると幸いです。

合掌